

アルゼンチン -- 南米におけるクラシックの殿堂コロン劇場 (特集 途上国のエンターテインメント事情)

著者	宇佐見 耕一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	203
ページ	22-23
発行年	2012-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00045831

アルゼンチン

―南米におけるクラシックの殿堂コロン劇場―

宇佐見 耕一

アルゼンチンでのエンターテインメントといえばアルゼンチンタングが有名であり、ブエノスアイレスの下町サンテルモ地区には外国人観光客向けのタンゴ劇場から、地元の人々の集うタンゴバーが数多くみられる。日本からの観劇ツアーも多い。タンゴと並んでブエノスアイレスの観光名所に世界三大オペラ座のひとつとされるコロン劇場がある。コロン劇場では、クラシック音楽のコンサートの他にバレエやオペラが開催され、クラシック部門の充実度はラテンアメリカ随一である。

ブエノスアイレスの中心を通るセリート通りとリベルタ通りの間に一九〇八年に建設されたコロン劇場は、ブエノスアイレスの人々の自慢である。地元の人々は、ミラノのスカラ座とパリのオペラ座に並ぶ世界の三大オペラ座のひとつ

であるという。もともと、世界三大オペラ座はスカラ座とオペラ座のほかにウィーンのウィーン国立歌劇場であるという人も多く、その他にも著名なオペラ座は多数あり、その定義は定まっていない。このコロン劇場は歌劇団、バレエ団および劇団付きオーケストラとブエノスアイレス・フィルハーモニーの本拠地となっており、多彩な公演が行われている。クラシックという入場料が高く、高所得者や中所得者が観劇者の中心であるが、天井桟敷は非常に安い価格に設定されており、庶民でも観劇できるようになっている。筆者は

タクシーで運転手が熱心にオペラの出し物の話をしてきたのを数度経験している。また、近年ブラジルからの観光客も多く来場しているように思われる。コロン劇場ならびにバレエ団等はブエノスアイ

レス市の外郭団体となっている。そのため、コンサートやバレエはコロン劇場以外でも市内にいくつもある公会堂で安価な価格で公演を行っており、クラシックはブエノスアイレス市民の身近な存在となっている。また、コロン劇場から数ブロックのところにはコリセオ劇場があり、こちらでもコンサートやオペラが上演されている。

コロン劇場がブエノスアイレス市により建設された一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてアルゼンチンはパンパ平原で生産される農牧産品の輸出により経済はひとつの黄金期を迎え、当時のアルゼンチンの推定一人当たりGDPはヨーロッパの主要国並みであった。この時代にブエノスアイレスの街並みもヨーロッパ風になり、コロン劇場はそうしたヨーロッパ風の街並みの不可欠な一部となっ

ていった。ヨーロッパから遙かに遠い南米のラプラタ川の河畔に、ヨーロッパに負けないオペラ座を建設することは、ヨーロッパから移民してきた人々の夢であったに違いない。

コロン劇場の建設はブエノスアイレス市の委嘱により一八九〇年に始まり、三人の建築家が関わりを持った。前任者二名の建築家の死去の後、ベルギー人建築家ジュールス・ドルマルが事業を引き継ぎ、一九〇八年に劇場を完成させた。建物はイタリアのネオルネッサンス様式とフランスのバロック様式の混合と言われている。正面入り口から劇場に入ると、彫刻と絵画で装飾されたサロンがいくつかある。さらに階段を上がると、豪華絢爛な装飾が施された、座席収容人員が約二五〇〇人のホールに至る。内部は平土間座、側面はバルコと呼ばれる桟敷席となっており、桟敷席は六名分の座席がある。その上に天井桟敷がある。コロン劇場は二〇〇六年から開場一〇〇周年を期した大規模改修工事に入り、二〇一〇年に再開している。改修期間も近隣のコリセオ劇場を中心に、市内の劇場でコロン劇場によるコンサートやオ

ペラとバレエの公演は続けられた。

コロソ劇場は、一九〇八年の五月二五日のアルゼンチン独立記念日にベルデイ作のオペラ・アイーダで正式に幕を開けた。一九二五年にブエノスアイレス市は、劇団付きオーケストラ、歌劇団、バレエ団およびスタッフを持つに至った。また同劇場には、コロソ劇場高等芸術院（I S A : Instituto Superior de Arte Teatro Colon）が設置され、同芸術院にはバレエ、音楽、オーケストラ・アカデミー、オペラ振り付け、オペラ音楽、演出コースがあり、コロソ劇場で活躍する芸術家のみならず、アルゼンチンのクラシック芸術の養成機関の役割を果たしている。

公演される演目は、既に定評のあるクラシックが中心である。二〇一二年度のブエノスアイレス・フィルハーモニーの定期公演は、年一三回予定されている。公演曲をみると、ショスタークコピッチ、エルガー、プロコフィエフ、マーラー、シベリウス、ドビッシ、リヒャルト・シュトラウス、ベートーベン、ブルックナーなど名の通った作曲家の作品が中心である。とはいえ、演目のなかには現代タンゴの第一人者であるピアソ

ラの作品も二回の演奏会で取りあげられている。ブエノスアイレス・フィルハーモニーは職人肌の奏者がそろったオーケストラであるが、ブエノスアイレスという移民の故国ヨーロッパから遠く離れたボヘミアンの雰囲気のある街で聴くその演奏は、深く心に染み入るものがあった。指揮者はアルゼンチン人に限らず、他のラテンアメリカや欧米から招聘されて振る場合も多々みられる。また、一月から二月にかけての夏期のオフシーズには、ブエノスアイレス市内の公園で市民に向けた無料の野外コンサートが行われる場合があった。

二〇一二年度のオペラの公演は、九回の公演が予定され、一回の公演は通常五日間行われる。ペルデイなどのクラシックなものが中心であるが、アルゼンチンでは初演される作品も披露されている。舞台監督はアルゼンチン人の他に欧米から招聘される場合も多い。出演者は、主役級では欧米からの招聘者に加えてコロソ劇場高等芸術院出身者も多く、コロソ劇場歌劇団が中心となっている。伴奏はコロソ劇場付き管弦楽団が行う。なお、コロソ劇場管弦楽団は、オペラとバレエの伴奏が多く、通

常オーケストラピットのなかで演奏しているが、年に数度独自の演奏会も行っている。

バレエの公演も、二〇一二年度の演目をみると七回の公演が予定されており、一演目は通常五日間公演される。カルメン、ラ・シルフィード、眠れる森の美女、もとはオペラ曲であるがチャイコフスキーのオネーギンなどクラシックな作品が中心となる。とはいえ、音楽はクラシックであるが振り付けは独自のものであったりする。振り付け師も欧米から招聘したりする場合が多い。ダンサーも主役級は欧米からの招聘者が多々みられるが、ほとんどがコロソ劇場高等芸術院出身者であり、プリンシパルのカリリーナ・オルメードとアリシア・クアダリも同芸術院出身である。また、同バレエ団には世界的に名声を博した男性ダンサーのフリオ・ボカとマクシミリアーノ・ゲラが名誉ダンサーとなっている。伴奏はコロソ劇場付き管弦楽団が行う。なおブエノスアイレス市は、クラシックバレエのコロソ劇場バレエ団の他にモダンバレエ団も持っている。有名な演目中心のコロソ劇場バレエ団がほぼ満席であるのに対し

て、市立サンマルティン劇場等で公演するモダンバレエ団は週末でも空席が目立つこともある。とはいえ、同じ年にコロソ劇場バレエ団がベートーベンの交響曲第七番を振り付けて演じたのに対し、モダンバレエ団もショパンのピアノ協奏曲第一番を振り付けて演じたことがあった。モダンバレエの方は、数こそ少ないが熱心なファンが熱い視線が注がれている。

このようにコロソ劇場は、コンサート、オペラ、バレエの公演で南米の中心であり、アルゼンチンの芸術の水準向上に貢献している。日本ではアルゼンチンといえど、タンゴのみが目目されるが、ブエノスアイレスはこうしたクラシックが盛んであることも知っていただきたい。また、コロソ劇場は、劇場自体が芸術品であり、国の記念建造物に指定されている。劇場をみるツアーもあるので、劇場だけでも鑑賞することができる。

（つぎみ こういち／アジア経済研究所 ラテンアメリカ研究グループ）

《参考》

<http://teatrocolon.org.ar/es/index.php?id=home>